

保険AI実装のリアル

[Vol.2] AI-OCRから生成AIへ 畔柳主税

保険とAI両分野のスタートアップが提携

生成AIの発展により、AI-OCRの限界を超え保険業務は「理解・判断」領域へ進化する。保険とAI両分野のスタートアップの提携・挑戦により、業務高度化と競争力強化への期待が高まる。

変化の起点AI-OCR

生成AIの進化により、AIの普及と活用レベルは一段と高まっていく。その変化の起点となった



左からUpstageAIカントリーマネージャーの松下氏、畔柳氏、アイリックコーポレーションの山内氏・建部副社長

る。保険業界においてのがAI-OCRだ。

も、これまでの業務効率化中心のAI活用から、

より高度な業務への適用が現実味を帯びてきた。

その変化の起点となった

の代替として100%の読み取り精度を期待するが、帳票のばらつきや記載の曖昧さにより、それを完全に実現することは難しい。そこでわれわれは、「完全に読む」としては、

「完全に読む」としては、

「完全に読む」としては、

「完全に読む」としては、

「完全に読む」としては、

「完全に読む」としては、

「完全に読む」としては、

「完全に読む」としては、

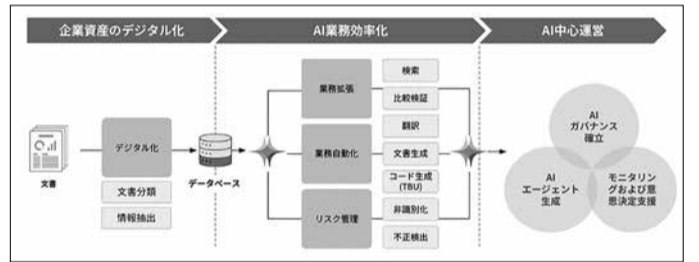
「完全に読む」としては、

生成AIが「理解・判断」の領域を補完

を実現してきた。

AI-OCRの壁

例えば診療明細書の画像データをOCR処理に



UpstageAIが切り開くAI活用の未来

よりデータ化した後、手術・処置名をKJMコードへ変換し、業務システムで処理可能な形にする。さらにレセプト

チェックシステムを提供する企業の技術と連携することで精度を補完し、自動査定まで到達する領域も生まれた。

しかし、複雑な給付金請求においては、

限界が明確だった。帳票の種類・内容が多様であるだけでなく、それを理解する

医療知識や保険商品知識、さらには約款に基づいた支払い判断という

「知恵」が必要となるからである。この「理解」

と「判断」の領域こそ、従来のAI-OCRでは越えられない壁だった。

生成AIがAI-OCRを補完

この壁を打ち破る可能性を持つのが生成AIである。生成AIは、帳票全体を文脈として捉え、内容を理解し、約款や業務ルールに基づいて判断

することが出来る。ここで重要になるのは、単なるAI導入ではなく、

「誰のデータと知見でAIを動かすか」という視点である。

この流れの鍵を握るのが、13年間働いた古巣であるアイリックコーポレーション(アイリック)と、現在関わっているUpstageAI(Upstage)だ。

アイリックは長年にわたり蓄積してきた保険商

品データベースや約款情報、業務ノウハウ、そして業界ネットワークという強みを持つ。一方、Upstageは世界トップクラスのAI-OCRと、日本語に最適化されたLLMを有し、「読み取り」「抽出」「理解」「生成」を一気通貫で実現する技術を持つ。この両者が組み合わせることで、単なる帳票処理の効率化にとどまらず、保険業務そのものを高度化するソリューションが現実のものとなる。

保険業界で培ってきた知見と最先端のAI技術が融合する瞬間に立ち会い、私は純粹にワクワクする感覚を覚えた。これは単なる技術導入ではなく、業界の未来を共に創る挑戦が始まる実感だ。実際にPOCを通じて、AI-OCR単体では難

しかったケースでも、生成AIによる補完で実用レベルに到達し、さらに判断業務まで踏み込める手応えが得られている。保険会社においてもAI専門部署の設立が進むなど、この領域への期待は急速に高まっている。

アイリックとUpstageで挑む業界の未来

アイリックとUpstageの連携は、保険業界における生成AI活用の「実装モデル」となり得る。アイリックの業務知見とデータ、Upstageの先端AI技術が融合することで、「理解につながるAI-OCR」と「業務を高度化する生成AI」が一体となる

生成AIが一体となり、これまで人に依存していた業務を大きく変革する。これは単なる効率化ではなく、保険会社にとっては競争力の源泉となる。保険金支払、引受審査、顧客対応といった中核業務において、スピード・精度・品質を同時に引き上げることが可能になるからだ。AI時代において重要な

のは、技術をどう組み合わせ、どこまで踏み込むかである。アイリック×Upstageの提携は、その答えを示す挑戦であり、保険業界の未来を切り拓く第一歩となる。

畔柳主税(あぜやなぎ ちから)

UpstageAI(株) 保険事業アカウンティング・営業に従事。企業間コラボレーションでの新規事業創出を得意とする。(毎月第1水曜日掲載)